

【論文】

カリブ海とロビンソン・クルーソー物語（5）

磯 山 甚 一

The Caribbean Sea and the Robinson Crusoe Story（5）

ISOYAMA, Jinichi

要旨：ロビンソン・クルーソーの物語には彼が最初にアフリカとのあいだを往復して交易をすることにより大きな利潤をあげたことを始めとして、ブラジルで農園を手に入れてからモイングランドとの交易で利潤をあげるなど、貨幣にまつわる言説が含まれている。彼は孤島に28年間を過ごすあいだでさえも、難破船に残された金貨や銀貨を発見する。孤島に過ごすかぎり、それらの貨幣は「無用の長物」であるにもかかわらず、彼はそれらの貨幣を自分でつくった住居に持ち帰って保管し、島を離れるときには忘れずに持参するのである。島を出てからは、彼が行方不明であった28年間の期間にもブラジルの彼の農園から大きな収益があがっていたことが判明し、それらの収益はきちんと彼の手に渡る。これらの貨幣にまつわる言説を考察することによって、ヨーロッパが発見しつつあった地球上の他の地域と、そのヨーロッパとの結びつきを、ロビンソン・クルーソーの物語がいかに表現しているかを明らかにする。

キーワード：貨幣、商人、労働、円環的時間、富

第 章 貨 幣

はじめに

今回は、ロビンソン・クルーソーが島に漂着した直後、自分が乗ってきた船に残されていたことを発見する「ヨーロッパやブラジルの貨幣、スペイン弗貨、そのほか金貨銀貨など、とりまぜて英貨にして三十六ポンド相当額のお金」(p. 75)¹⁾に焦点をあてる。ロビンソン・クルーソー物語に

おけるその「貨幣」の言説をてがかりにしてこの物語を考察してみよう。

島に一人取り残されてそれらの貨幣を発見したとき、彼はそれがその島にいる彼にとって「無用の長物(O drug!)」であるという。そうみなした彼は、そのお金を見つけたところにそのまま残していこうとする。「無用の長物よ。お前はいったいなんの役に立つというのか。お前は今の私に鏝一文の値打ちでもあるというのか。お前はもう拾いあげるにも値しないのだ。いくらお前が山のようにたくさんあったところでこのナイフ一本にもとうていかなわないのだ。お前を使おうにも使いようが私には全然ないのだ。そこに静かに自分の運命をまち、救われる値うちのないものとして、海底の藻屑と消えるがいい」(p. 75)。

ロビンソン・クルーソーが島に漂着し、そこがよいよ無人の島らしいことが明らかになりつつあるときのことである。彼のこのことばを聞くと、一見してその言い分は確かに正しいのではないかと思われるので、彼がそれらの貨幣をそこに置いて行ってしまうのかもしれない、とわれわれ読者は考える。ところが、そう言った直後に、すなわち「海底の藻屑となるがいい」と言ったその直接話法の貨幣への呼びかけ文に続けて、彼は地の文で次のように言明するのである、「とはいうものの、私はまた考えなおして、その金をもってゆくことにした」と(p. 75)²⁾。

その後彼がそれらの貨幣をどう処分したかといえ、その島に独力で築いた住居に持ち込み、「引き出し」の中に置くことにする。さらに彼は22年後に別の難破船から見つけた金貨や銀貨の類も一緒にしておき、やがて28年間滞したその島に別れを告げるときにも、その存在を忘れてはいなかったのである。「例のお金ももってくるのを忘れなかった。今ではすっかり錆びついたり変色したりしていた。少しこすったり手でさわったりしているうちにどうにか銀らしくなった」(p. 273~4)ものを、イングランドに持参したのである。

最初にそれらの貨幣を見つけたときに、この文と文の切れ目となっているこの一瞬のあいだに、いったい彼が何をどのように考えなおしたのか。

今回の考察はいわば、彼が考えなおしたというその言語的空白のときに彼の頭脳の中で何があったのか、とうことだと言っていいかもしれない。

ロビンソン・クルーソーがおかれた、孤島での生存と貨幣がかかわるこのような状態をどう考えればいいのかは、単に島のなかで彼が目にした貨幣のこと、また彼がそれをどのように扱っているかだけではなく、彼がその島に漂着するまで、さらに彼が島を脱出して以後、それぞれ彼がどのように貨幣に関係しているかを考慮せざるをえないだろう。そうすることによって、「わたしは考えなおして、その金をもってゆくことにした」という彼の行動を始めとして、この物語に現われる貨幣に関わる事象の意味を探ってみよう。そのように突然彼の生活に闖入してくる貨幣が一方にあり、彼の島における生存をめぐる活動が一方にあるときに、鍵となるのは、両者の結びつき、両者のあいだの連絡通路、または「穴」³⁾、それを彼が「海底の藻屑となるがいい」と述べた直後に、どこにどのように見出すか、ということになるだろう。

以下の叙述の順序としては、イングランドの海外進出にともない、イングランドとその他の地域との交流が盛んになったことによりもたらされた、地域間の差異が価値をもたらすものとしての貨幣をまず確認する。次には、ロビンソン・クルーソーの島における活動と貨幣との結びつき または結びつきのないことを確認する。さらには、ロビンソン・クルーソーの時間観念と貨幣の関係を整理してみよう。最後には、彼の物語において、「富(wealth)」がどのようなものとして把握されているかを検討する。

1. 島に漂着するまで 地域間の差異の表現としての貨幣

* ギニア航海

ロビンソン・クルーソーは生まれてはじめてイングランドの外に航海に出た際に「金額にして四十ポンドの玩具や安物の雑貨類」を持参した。「この四十ポンドという金は親類の者に手紙を書いて、その援助をたのみ、かき集めたもの」(p. 39)だという。年代は1600年代の中葉、金額は英国

の貨幣の単位で述べたものである。

その航海の目的地がどこであるか詳細は述べられていない。暗示としては、彼と一緒に航海に出ることになり、彼にそれらの「雑貨類」を準備するように助言した船長が、かつてギニア沿岸に航海したといわれるだけである。そのギニアとは、アフリカの西海岸一帯を指す名称であった。この航海に出ることによって彼は自分が「船員で商人 (a sailor and a merchant)」になり、さらには「ギニア貿易商 (a Guiney trader)」になったとみなした。後で彼が語るところによると、ギニア海岸にいるのは黒人 (negroes) であり、安物と交換に (for trifles)、砂金や、象牙、黒人などを買うことができたのだという (p. 59)。

そのアフリカの地におもむくさいに彼は船長の助言にしたがって「玩具や安物の雑貨類」を「商品 (adventure)」として持参した。後に彼が語るところではそれらは「数珠玉、玩具、小刀、鋏、手斧、ガラス製品」などであった。現地ですれらと交換することにより、ロビンソン・クルーソーのようなヨーロッパ人は「砂金、薬用種子、象牙」や「黒人(つまり奴隷)」を入手できるというのである (p. 59)。ギニアに航海したとき彼はその40ポンド分の雑貨類と交換に「五ポンド九オンスの砂金 (gold dust)」を手に入れ、その砂金をロンドンに運んだ。かくてそれはロンドンの地において「三百ポンド近い金 (almost 300l.)」を生んだのである。

単純に計算して、650%の利潤が出たという、今日でも、そして多分その当時としても奇跡的なビジネスが成立しことになる。もしも、彼の手にしたポンド貨の数値を航海の前と後で比較してそれがそのまま彼の利潤になるとすれば、ロビンソン・クルーソーが従事したようなアフリカ航海以上にうまい話はまずありえない。ひとつの航海に出て「商人」としてイングランドとアフリカを往復しただけで、元手となった金額の実に7倍半にもなる金額が自分のものとして転がり込んできたのであるから。

このときの航海では、ロビンソン・クルーソーが品物を持ってイングランドの外に出て、その先でその品物と交換に入手した砂金をもってきたと

いう、それだけのことである。この交換の際に焦点となっているのは、一方が「玩具 (toys)」「雑貨類 (trifles)」であり、他方が「砂金 (gold dust)」である。彼の親類の者が彼の父か母をくどいて40ポンドを準備した段階ではそのポンド貨は何ら貿易とは関係のないイングランドで発行された貨幣である。だが、その貨幣を元手にして彼が「玩具 (toys)」「雑貨類 (trifles)」を入手してアフリカ航海に持参しようとする段階で、それらの物資類は「商品 (adventure)」となった。

それらの商品は彼のおもむいたアフリカの土地で、彼の言うとおりでとすれば、彼の思惑どおりに交換のできる希少価値のあるモノとなり、ギニアの住民はそれらを欲しいと思って「砂金 (gold dust)」と交換に応じたのであろう。ロビンソン・クルーソーのロンドンで生産された「雑貨 (toys and trifles)」が、ギニア沿岸においてうまく交換を成立させるための一方のモノとなった。もう一方の砂金は、「砂金」という姿のままでは、流通する貨幣ではなく、商品交換のためのいわゆる媒介としての地位は得ていない。ロビンソン・クルーソーがこの航海に出たその先で行なった「貿易商」としての活動は、たんなる物々交換と言ってもいいかもしれない⁴⁾。だがその砂金を彼がロンドンに持ち帰ると、「だいたい三百ポンドくらい (almost 300l.)」になった。これはもちろんイングランドの貨幣のことであり、金地金のことではない。

彼がこのように語る経緯が伝えることは、イングランドでは単に「玩具や安物の雑貨類」であるものが、航海先では「砂金」と交換可能な希少価値のあるモノとなり、その「砂金」こそ、イングランドに運ぶことでポンド貨幣と交換可能な希少価値が生じるという事情である。イングランドと航海先のアフリカ、その両地で共通に流通すべき媒介としての貨幣はまだ存在していないことになる。

これらを成立させる条件は、アフリカがまだヨーロッパの経済圏に含まれておらず、ヨーロッパの各種の貨幣の流通していない地域にあたることである。ポンド貨幣は、金地金と同じくアフリカでは価値がない。地理的

な遠隔地であるアフリカはヨーロッパ域内の経済活動には含まれないので、その域外、すなわち外部となっており、イングランドとギニア（アフリカ）の間でいわゆる国際金融は成り立っていない。それが成り立つためには、イングランドと同様にギニアでも共通にポンドが貨幣として流通するような、イングランドとギニアを包括する金融共同体の成立が必要である。彼がイングランドに持ち帰ったその砂金は、イングランドで鑄造の過程を経て貨幣に姿を変えるかもしれないが、ギニアにおいて「玩具や安物の雑貨類」と交換される段階では、単なるモノにすぎない。ロビンソン・クルーソーはいわば、これらの異質な両地域のあいだを、先輩の船長の導きによって行き来したのである。その先輩の船長がいかにしてアフリカの土地を知るにいたったか、その事情は語られていないのだが。

一方にイングランド、もう一方にヨーロッパから見て外部としてのギニア、地理的に離れたこれら両地域があり、その間の差異を活用することにより、ロビンソン・クルーソーは当初40ポンドだった貨幣を300ポンドにするというゲームに従事できた。彼の「商人（merchant）」または「貿易商（trader）」としての活動の特色は、そうした二つの地域間を行き来できたことである。入手したポンド貨幣について、彼は「私が新たに得た富（my new gained wealth）」として言及しており（p. 40）、富を増大させるためには、貿易商としての活動が豊かな源泉になりうるとされている。

彼の言い方から判断すると、彼が「砂金」を売って手に入れた300ポンドは、まるまる全部が彼のふところに入ってしまったようである。元手になった「四十ポンドという金」は、「親類の者に手紙を書いて、その援助をたのみ、かき集めたもの」だったのであり、起源をたどると、どうやら彼自身の父か母がその金の出所らしい。息子の放浪癖に心をいためていた、あの親たちである。その様子は、何らかの契約にもとづいた借金とか、投資というたぐいの「かき集め」かたではなく、贈り物として彼の手元を集められたものようだ。その相手（おそらく両親）に対して利潤があったことを報告してはいないからである。「...息子の帰還以前に死去した彼ら

は、投資を回収していない」⁵⁾とはいうものの、両親がその金を「投資」として出したとは想定できない。

その親類がいかなる手段で40ポンドにのぼる貨幣を入手したのか、彼の父か母が出所らしいということだけで、それらの貨幣の起源は厳密に言えば明確でない。ロビンソン・クルーソーが「商人」としての「冒険(adventure)」を開始するために起源となった40ポンドは、彼への贈与だったということである。これ以後彼が島に漂着するまでの物語は、この40ポンドから生み出された300ポンドの貨幣がさらなる貨幣を生み出していくという連鎖をめぐる展開される部分が少なくないことから、これらの貨幣をめぐる彼の活動はこの物語の構造の一筋を担っているといえよう。

* ブラジル貿易とブラジル農園経営

先にも述べたとおり、これ以後のロビンソン・クルーソーの冒険(adventure)は、このときに入手した300ポンドが元手となって連鎖していく部分が多い。彼が次に航海に出るときには、その300ポンドのうちの100ポンドを持参し、残りの200ポンドは「死んだ船長の後家さんに託した」(p. 40)。だが、身につけて持参したその100ポンドは、彼がその後トルコ海賊の襲撃を受けて奴隷にされてしまうことにより、行き先は不明である。

彼はその海賊のもとを脱出して海上を漂流しているところをポルトガル船に救われ、そのポルトガル船の船長がロビンソン・クルーソーの所持品を買い取って貨幣に換えてくれる。この貨幣は「スペイン弗貨(pieces of eight)」(p. 54)と呼ばれ、「スペインや南米で使用されていたスペイン銀貨」⁶⁾である。彼の所持品のうち脱出に際して彼の乗っていたボートがスペイン弗貨80枚、ボーイのジューリーその人の身柄が同じく60枚、豹の皮が20ダカット、ライオンの皮が40ダカットである。これらを総計すると「わたしの荷物の代金は全部でスペイン・ドル貨約二百二十枚となり、これだけの資金を懐にしてブラジルの土を踏んだ」(p. 55)のである。

彼がブラジルに上陸すると、その220枚の「スペイン弗貨」がその地で通用することがわかり、それで買えるかぎりの未開墾地をブラジルで入手する。かくて彼は、そのブラジルの地でプランター（planter）として農園経営に従事することと相なった。彼がこうして入手した農園（plantation）はもちろんそれ自体、彼自身がいうとおり、彼の富（wealth）を生み出す源泉である（p. 58）。その‘wealth’を含む文は邦訳にも「金もたまるいっぽう」とあるとおり、彼の手元に貨幣がどんどんたくわえられたという意味に理解して間違いないだろう。

彼はそのように農園経営に従事するうち、再びあのアフリカ往復で手に入れた貨幣を想起する。ポルトガル人の船長の助言にしたがって、ロンドンで後家さんに託してきたという200ポンドのうちから、100ポンド分を用いてブラジルの土地に向くような「商品（goods）」として送ってもらう計画をたてる。その商品というのが、イギリス製品（English manufactures p. 57）であり、たとえば「布地、毛織物、紡毛（cloth, stuffs, bays p. 57）」であった。これらがブラジルの「当地ではとくに貴重で需要の多い品物であった」とある⁷⁾。それらのイギリス製品を当地で「売る」ことにより、「原価の四倍以上の利益（more than four times the value of my first cargo）」を獲得したのである⁸⁾。

このようにしてイングランドとブラジルのあいだで商品を取り引きすることであげたこの場合の彼の利潤が、かつて彼がギニア航海であげた利潤と比較され、以前の利益には及ばないと記述されている。だが、今回の場合はその利潤が利潤であることの根拠が多少あいまいであり、単純に比較できないことを指摘しておこう。以前にイングランドに本拠を置いてギニア航海で得た利益の場合、それはポンド貨幣に換算して計算された。40ポンドが300ポンドになったという実にわかりやすい計算であった。ところが、今回のイングランドとブラジル間の貿易では、単に4倍の対価と言っているだけであるから、何を基準にして彼が利益を算定しているのか明確でない。普通に考えれば、100ポンド分のイギリス製の雑貨類が4倍に

なって400ポンドになったと考えるのであろうが、ブラジルではおそらくポンドは流通していない。彼がのちに島に漂着した際に船内で発見するお金について「三十六ポンド相当額のお金」と言っていることから、各国通貨には何らかの国際的な交換レートがあったものと想定できるが、「スペイン弗貨」が流通していることは確認しているものの、ポンドとスペイン弗貨の交換レート等は明確にされていない。

これらの言説から読者が読み取るべきは、ギニア貿易もブラジル貿易も、同じイギリス製品を焦点として、イングランドとそれらを運んでいった先、それらの両地で価値に差異があることを利用することにより、貨幣に換算した利潤が生み出されているということである。重要なのは何よりもそのことなのだ。ロビンソン・クルーソーが「商人」になったというのは、この差異を活用することができた、ということである。

ブラジルにおける農園経営でロビンソン・クルーソーはタバコと砂糖の栽培に手を染めていたようであるが、彼が明確に述べているわけではないものの、彼がタバコの葉や砂糖黍の栽培を自分自身の手でおこなっていたわけではなさそうである。のちにアフリカへ奴隷を手に入れるために出かけて難波し無人島に漂着する結果になるが、その航海の計画に関して「ブラジルで仕事をさせるための黒人」(p. 59)と述べられるとおり、黒人奴隷による労働が行なわれていたのである。

その奴隷労働と貨幣はどう関係するかについては何も述べられていない。彼が無人島に漂着して行方不明の期間にもその農園が代理人の手で運営され、その農園からあがる利益があったことが判明することとの関連で叙述されると想定されるであろうが、実はその際にもロビンソン・クルーソーの関心は農園からあがる利潤のほうにばかり向いていて、奴隷の労働そのものにはほとんど無関心である。

とはいうものの、彼の農園で働かされていたと想定される奴隷たちは、歴史上でも悪名高い近代奴隷制度の一角で働かされていたことをごく簡単に整理しておこう。地域によってはほとんど絶滅させられるほどの扱いを

うけ、労働力としてはあまり有益ではないことが判明しつつあった現地人インディオたちにかわって、外から導入することが可能な労働力としてアフリカの黒人が焦点となっていたのである。アフリカの黒人たちは、イギリスを含むヨーロッパ、アフリカ西海岸、南北アメリカを結ぶ「三角貿易」と呼ばれる構図のなかで売買された。

たとえば、イギリスのリヴァプールを出発した奴隷貿易船は、奴隷と交換するために、アフリカの黒人王国が求める鉄砲やガラス玉、綿織物などをもっていきました。それらを西アフリカで、奴隷と交換したわけです。ついで獲得した奴隷を悲劇の「中間航路」にそって輸送し、南北アメリカやカリブ海域で売り、砂糖（まれに綿花）を獲得して、母港リヴァプールに帰るのでした。⁹⁾

ロビンソン・クルーソーはいわばこの「三角貿易」のヨーロッパにあたる頂点を省いたかたちで三角形の一辺に沿った活動をして、ブラジルを本拠にした奴隷貿易を行なおうとしたといっていいただろう。自分の所有するブラジルの農園で仕事をさせるために奴隷を連れてこようというのである。

農園における奴隷は、買うときの一時的コストは高いが、のちは最小限のコストでまかなえる労働力になる。農園経営者にとって、そのような奴隷の存在は労働のコストを極小に維持する役割を果たしている。農園に奴隷が存在し続ける限り、生産のコストと生産物の価格とのあいだに考えられる限り可能な最大の水準が安定的に続き、それによって農園経営者の利潤は最大のまま維持される。アフリカ貿易に商人として従事し境界を超えることで利潤を手にしたところの活動を、農園経営者としてブラジルにいながらにして実現していることになろう。ブラジルの農園で生産したタバコや砂糖（アフリカ貿易における「玩具や安物の雑貨類」にあたる）を、農園の外の別のもの（この場合には貨幣）と交換する（アフリカ貿易における「砂金」との交換にあたる）ことで、それらのあいだにある差異を利潤として獲得するのである。今日の企業であれば、オートメーション化などの技術革新でコスト削減を実現して製品差別化をおこなうことにあたる

部分を、奴隷労働が引き受けていることになる。

2. 島に着いてから 島内で発見する貨幣

* 島に貨幣があること

こうしてブラジルで農園を経営していたロビンソン・クルーソーがアフリカに航海し自分の農園で働かせる黒人を連れてこようと計画をたてる。その航海途上で嵐にあって遭難し、漂着した島で一人きりの生活が始まるのである。そのときに彼が船内で見つけた貨幣について、彼が島のなかで生存していくこととの関連でおそらく誰にでも直観的に理解しやすいと思われることを確認しておこう。

第一に、「三十六ポンド相当額のお金」を見ながら彼の言っていることが、その貨幣が島における彼の生物学的なレベルの生存にとって直接的に役に立たないということであるとすれば、確かにそのとおりである。それらを直接口に入れて食料にするわけにはいかないのはもちろんだが、たまたま目の前にある金属塊は、どこかの鑄造所で人手と何かの工作機械などを用いて金と銀が地金から加工されて流通していたに違いないのだが、貨幣の形のままで、彼の言うとおり、何かを切断するための「ナイフ」として用いることさえ難しい。

第二に、それらの貨幣は彼が島で何か活動をした結果として手に入れたわけではない。彼は一人きりで生存を覚悟して島でさまざまな準備のための活動をしていたが、その活動とそれらの貨幣は結びついていない。貨幣は偶然的に彼の目の前に出現した結果としてそこにある。たまたま難破船の船内にあったものを手に入れたにすぎないからである。島における彼の生存の実際と手元にあるその貨幣は、貨幣に内在する価値をめぐる因果の連鎖からみれば互いに何の関係もない。

第三に、それらを何かと交換するためには、すなわち、それらが今日のわれわれが通常知っているような意味で貨幣としての役割を果たすようにするためには、彼が島の外に出るか、あるいは島の外からそれらを貨幣と

して認める人々がきて彼と何らかの接触がなければ不可能である。島の外部とのコミュニケーションが必要なのである。もちろん、今日の金融市場のように、電子的な通信網で世界中の取引所が結びつけられ、貨幣価値にみあう莫大な数字が「マネー」として瞬時にして世界中を駆けめぐるといふ状況は、ロビンソン・クルーソーの島と外の世界のあいだでは起こりえない。そもそも、彼の島の生活の物語に限って見た場合、彼の島の生活なるものの想定上、島の外との接触はないことになっている。つまり、われわれのよく知っているはずのロビンソン・クルーソーの島の物語の中には、その「ヨーロッパやブラジルの貨幣、スペイン弗貨、そのほか金貨銀貨など」は、物語本来の要素として侵入するはずのないものである。

彼が「英貨にして三十六ポンド相当額のお金」を発見したことに関連してその貨幣について考えるための前提を確認した。彼が吐き捨てるようにそれらを「無用の長物」と述べたときの前提とは、以上のようなことであろう。彼はその後この36ポンドのお金を忘れ去ってしまうわけではなく、それが引き出しの中にしまっておりとて言及する。そのときもまた彼は「現状では金があっても少しも役にたたないし、少しの利益にもならなかった」(p. 140)と述べるのである。

ロビンソン・クルーソーは島に閉じ込められていながら、そこで金貨や銀貨を所有している。彼の島は閉じられていてその外部との接触をもたないが、外部があること自体は経験によって彼は知っているのだから、その外部とコミュニケーションを持つことが自然的な制約によって禁止されているという状況である。そのような状況は貨幣という存在を目の前にした彼にその貨幣を「無用の長物」と言わせることになるが、もっと一般化して考えれば、「究極的には他者とのコミュニケーションの問題」¹⁰⁾とされる資本主義についてもあてはまる。彼のその島とは、そのコミュニケーションがなりたたない場合であることにより、その島のなかでは資本主義に関連する問題が発生しないということである。

* 労働

貨幣に関連して、ロビンソン・クルーソーの島での生活を記述するために用いられるもうひとつの重要な言葉がある。すなわち、「労働 (labour)」である。「彼は嘗々として労働に従事する」¹¹⁾といわれるように、彼の島での活動全般が、一般に「労働」として認識されてきた。ここでは、彼の島におけるさまざまな活動を労働として位置づけることの無意味さを確認しよう。

ロビンソン・クルーソーの「労働」について述べた古典的な言及として、かのマルクスのことはすでによく知られているだろう。すなわち、マルクスが「労働価値説」に関連して、このロビンソン・クルーソー物語を取り上げたのである。「彼[ロビンソン・クルーソー]は……相異なる種類の有用的諸労働を為さねばならぬ」¹²⁾。

マルクスの「労働価値説」とは、「あらゆる商品の労働価値はその生産に直接的あるいは間接的に投入された労働の量によって決定される」という主張である¹³⁾。その考え方によれば、「一国の富の大きさはそれを形成しているさまざまな商品の生産に過去からいままで投入されてきた労働の大きさによって正確にはかられることになるのです」¹⁴⁾。ロビンソン・クルーソーの島内での活動を労働と名づけるとすれば、その島に当初の24年間は彼のほかに誰もいなかったのであるから、彼がその24年間に行なった活動の結果もたらされた成果が「労働価値」としてたくわえられ、マルクスの考え方から言えば、ロビンソン・クルーソーの「富」ということになると言ってもいいだろう。それが「労働価値」ということだからである。

もちろん、彼の島での生活の過程を叙述する言説にも「労働 (labour)」という語は彼自身によって頻繁に用いられており、島に漂着した人間であるから、自分だけで生き延びるため、それなりの活動はしなければならぬ。そのときに言われる「労働」とは、生存のための闘いが自然のままの環境と彼のあいだで行なわれているということである。彼はその過程で、

山羊を飼いならして繁殖させ、土地を耕して大麦を収穫し、人工物をこしらえて住居（彼はそれを城と呼んだ）としている。

今日のわれわれが労働という言葉を使うときには、それと貨幣は切っても切れない関係で語られる。「あらゆる商品の労働価値はその生産に直接的あるいは間接的に投入された労働の量によって決定される」ことにより、労働によって生み出した商品を貨幣価値に換算して計量する。われわれは貨幣経済の中に生きる者として、ロビンソン・クルーソーの「労働」を見てきたのである。

ところが、ロビンソン・クルーソーの物語において彼が漂着した島では、人間（ロビンソン・クルーソー）の労働と、金銀で製造された貨幣のあいだには、まったく何の関係もないことが明らかである。これは、労働の価値を貨幣に換算して考えることに慣れたわれわれには、一見して不思議なことのように受けとめられるかもしれない。だが、外部とのコミュニケーションをもたない彼の島のような場所における物語を読むかぎり、そのように受けとめざるをえない。

ロビンソン・クルーソーの労働は、すぐにわかるとおり、どこからか賃金を受け取ることを目的とする「労働」ではない。彼はヨーロッパ文明から持ち込んだ道具類は手元に置いているものの、生き延びるための活動、生存のための闘いを一人でしなければならない状況にいる。しかし、彼は「嘗々として労働に従事する」と言われる。そうして、どういうわけか、金貨や銀貨などの貨幣の類はロビンソン・クルーソーの活動とは無関係に、貨幣の方から彼の手元に入ってくる。それらの貨幣は、彼の労働がもたらした結果とみなすことはできない。労働価値を表現するものとしての貨幣ではない。

彼もみずから言っているとおり、漂着した船内で発見した貨幣の類は、その島にとどまる限り「無用の長物」である。自分が生き延びることだけを考えたならば、それは「ナイフ一本にもとうていかなわない」価値しかもたない。実際のところ、島に一人でいる限り、ロビンソン・クルーソー

にとって、金貨であれ、銀貨であれ、どんな有用性もありえない。なぜかといえば、彼の島は外部とのコミュニケーションが持ち得ないことになっているからである。ところが、ロビンソン・クルーソーは、船内で発見したその金銀の硬貨類を島の自分の住みかにも運んでいくことを決意する。「無用の長物」と言って、薄ら笑いを浮かべて軽蔑の目を投げかけたばかりの、その金貨や銀貨類である。そのような貨幣をなぜ自分の島にまで運んでいったのか。理由ははっきりと述べられているわけではなく、ただ単に「考えなおして、そのお金はもってゆくことにした」と言う。

ロビンソン・クルーソーの黄金にまつわるこのような不可解な行動については、ひとつの考え方としてこの物語が「目的合理的思考」では説明のつかない黄金幻想をかかえこんでいる¹⁵⁾という説明が提示されている。このテキストが、「一八世紀のイギリスという「重商主義帝国」……が生んだ一種の幻想小説と考えた方が、テキストの実態に近い¹⁶⁾という文脈で言われたものである。確かにロビンソン・クルーソーは、みずから「無用の長物」とみなしたお金を、船から運びだして自分の手元におく。さらに、島の生活を始めてから22年目には、難破して漂着した別の船内で、またもや銀貨を発見する。彼はそれを運びだして島に持ってきておきながら、「富(wealth)はふえたにちがいがなかったが、ゆたかになったわけではなかった」(p. 199)と述懐する。それらの行動はわれわれにはうまく説明のしようがないように思われる。というよりも、ロビンソン・クルーソーにとっても、それはうまく説明できないことだった、ということのように提示されている。これについては、つぎに時間と富の関係を話題にして解き明かしてみよう。

3. 時間の観念

* 島の時間

重要なことは、島で一人きりの生活をするという物語がこれから始まるうとしているとき、そして一人きりの生活が続いているさいちゅうに、彼

が明確に述べているとおり、何の役にも立つはずのない貨幣になぜ言及されており、後にはそれらを保管していることが述べられているということである。

ここで貨幣についてのわれわれの日常的な前提を確認しておくならば、「人が貨幣を保有するとき、それは貨幣自体を食べたり着たりするためではなく、いつか未来において何か実体的に役に立つモノを買うため」だということである¹⁷⁾。この引用の前半の部分はロビンソン・クルーソーについて先に確認したまさにそのことであるが、後半部についてはどうだろう。そうすると、彼が「とはいうものの、私はまた考えなおして、その金はもってゆくことにした」と書いたときに言葉では表現されない意図とは、彼の未来と関係するということになるだろう。もちろん、彼が一人きりのままで島にとどまる限り、その貨幣は何か「モノを買う」ことは不可能であるから、彼の行動は島を脱出して以後の未来を志向している。

彼は島に一人でたどり着き自分がこれから一人で生きていくことになると認識し始めたころ、自分の未来に対する意識が生まれた。ないしは島の中での自分の生存に関する未来への希望があった。未来とは時間の観念に属して意識されるものである。すなわち、彼は島の生活が10日か12日を経過したころ、「時間の計算がわからなくなってしまうのではないかと考えが浮かんだ」(p. 81)。そこで、大きな柱 (post) に毎日刻み目をつけ、7番目にはその2倍の長さの刻み目として、さらにその2倍の長さの刻み目を毎月の第一日目につけた。かくして、「週、月、年という時間を算定する」(p. 81) 方法を定めた、というのである。刻み目をつけたのが柱であることが象徴的であるように、ロビンソン・クルーソーがここで算定を始めた時間とは、まさにその柱のように直線的な時間であろう。過去から現在をとおり、未来へと伸びるものとしてイメージされる時間である。

ところで、われわれがこれまでロビンソン・クルーソーの物語を語るときによく知っていることになっているのは、彼が孤島の住民として日、月、年の円環的時間と円環のリズムのなかに捕縛され、自然を相手の農耕作業

を中心とした生活、彼の言ういわゆる「労働 (labour)」に従事して奮闘している彼の姿である。実際のところ彼は島で麦や米を栽培し、家畜を飼育している。彼の島には四季はないようだが、少なくとも雨季と乾季の周期があることは確かである。島に漂着してからきっかり1年を経過したとき、彼は「雨季と乾燥季が規則正しくやってくるように思われ、それぞれの季節に応じているんな準備をするために」雨季と乾燥季に季節を分けることを学んだ (p. 117)。その周期のなかで彼はそれ以後27年間を暮らすことになる。当初は予想もつかなかった長さであり、今の1年と次の1年がほとんど区別のつかない繰り返しであることにより、何年もの歳月が瞬時に過ぎ去るように意識させる時間の秩序である。実際のところ、島に着いてから4年くらいを経過したあとでは、時間は矢のように過ぎていく。「このあと、五年間というもの、たいしたこともなくすぎていったように思う」(p. 146)。ロビンソン・クルーソーの島における時間を、ある日と別の日が区別できず、ある年と別の年が区別できずに過ぎていく、円環的時間とみなしてきたゆえんであろう。

だから、その物語のうちに貨幣が侵入していることについては、よく説明のつかない「黄金幻想」として片付けられるのも無理もない。なぜなら、ロビンソン・クルーソーの言うことを文字どおりそのまま受け止めるだけでは、彼が貨幣を住居に持ってかえり保管しておこうとする行動の意味がわからない。彼が奮闘せざるをえない環境、すなわち雨季と乾燥季の繰り返しのリズムを刻む島の時間のなかでは、貨幣はだれが考えても彼がいうとおり「無用の長物」にすぎないからである。

だが、時間の観点から貨幣が表現している時間を考慮にいれると、それとは別の見方ができる。貨幣が表わす時間とは、太陽の1日周期のリズムや月の1ヶ月周期、雨季と乾燥季の1年のリズムにはまったく左右されない、柱に等間隔でしるしを刻み込んで算定できる直線的な時間のほうである。彼が貨幣を引き出しにしまっていたというのは、自然のリズムに支配される円環的時間とは別の時間秩序に属するものとして、直線的な時間秩

序に属する貨幣が島に着いた当初から侵入していたのである。彼が柱に刻み目をつけたのも、貨幣の表わす時間意識を彼が島に漂着した当初から内面化していたことを示す行動ということになるだろう。

* 島を離れて以後

ロビンソン・クルーソーが島を離れて以後は、にわかに貨幣に関する記述が多くなる。しかも、金銭の貸し借り、負債、債権などにかかわる言説が目立つ。そしてそれにともなって、島の時間のなかで確認しておいた二つの時間秩序のうち、貨幣の時間が奔流のようにして流れ始めることが明らかに見て取れるのである。雨季や乾燥季などの季節にまったくおかないなしの時間である。

彼はブラジルで農園を営んでいるときにアフリカから奴隷を連れてこようとして出発した航海で遭難したが、経営者である彼の失跡後もブラジルの農園経営は続けられた。彼の農園にかかわる金銭の出入りは継続され、記録が残され、その事実によって、莫大な額の貸し借りや負債、債権の言説が生じるのである。当然のことながら、そういう金銭の話と時間の観念は密接に結びついており、ロビンソン・クルーソー物語のなかで、大西洋の両岸を巻き込んで時間と貨幣が錯綜するいわゆる「信用」の秩序が一気に形成されつつあるという様相を呈する。

ロビンソン・クルーソーにとって、時間の観念なしにはそれらの貨幣の話はできないといっているだろう。島に滞在した期間が日付にもこだわりをもって正確に計算されたうえで28年2ヶ月と19日、イギリスに着いたのが1687年6月11日で、国外にあること35年間であった、として記述されている。このような時間へのこだわりは、島を脱出した後において、過去にさかのぼって時間と貨幣をまじえた言説を成り立たせるため、との見方も可能であるといえよう¹⁸⁾。かくして、富としての貨幣の蓄積が時間の作用であるとの印象を生み出すことができるのである。それはまた、「「時は金なり」という資本主義的時間観念への転換」¹⁹⁾が起りつつあること

についての物語でもある。

さきにも引用したとおり、「人が貨幣を保有するとき……いつか未来において何か実体的に役に立つモノを買うため」であることにより、貨幣の言説においては、未来を含めた時間軸が焦点となってくる。ロビンソン・クルーソーが島を脱出したあと、彼が島に滞在した28年間あまりの歳月がよみがえると、時間が過去にさかのぼるかのような印象を与えるが、実はそうではない。彼が島を出た現在を基準にすれば、過去に貨幣が関わっていた時間が、物語叙述の現在を未来とするときにこそ意味をもつ時間として、つぎつぎとよみがえってくる。その時間は、季節の循環とまったく関係がなく、数字で表わされ、しかも足したり引いたり可能な直線的な時間ではありえない。

具体的に見てみよう。ロビンソン・クルーソーは島を脱出してイングランドに帰り、ブラジルの農園に関する情報を得るためにリスボンにいる老船長のもとに行く。その船長はかつて彼をアフリカ沿岸で救って彼の持ち物を貨幣に換えてくれた人物であり、自身はすでに引退しているが、その息子がブラジル貿易に従事している。その船長はロビンソン・クルーソーの遺言書で「包括相続人」(p.276)として指定されていたのである。その老船長の話、および以後判明したことから話をまとめるとつぎのようになる。

ロビンソン・クルーソーのブラジルにある農園は財産として、彼が行方不明になった当初は彼が依頼しておいた財産の管理人たちが管理し、そこからあがる収入を管理していた。行方不明にならなければ彼の収入となるべきものを最初の7～8年間に受け取ったのは、相続人として指定されていた老船長であった。そのあいだの6年間は管理人たちにより農園からの収入の管理がおこなわれ、そのあと4年間は管理人たちの遺族が管理していたので、合わせて10年間は財産管理人たちの管理の計算書を入手した。その10年が経過すると、行方不明の彼が法律上の死亡者として認定され、財産は法律上の死亡者の財産ということになったので、その農園から

あがる収入は3分の1が国王に、3分の2が聖アウグスティヌス修道院に贈られていた。修道院と国王への収入の贈与は14年間のあいだ続いた。彼の農園は、もしも彼が死なずに帰るか、または彼の代理の者が請求すれば、管理人たちの手から戻ることになっていた。

老船長はロビンソン・クルーソーが生死不明のあいだにその農園からあがる利益を初めの7, 8年分受け取っていたが、船長自身が自分の事業に出費があったので、その利益を自分のために使ってしまった。そこで、老船長は生きていたことが判明したロビンソン・クルーソーに対して、債務者になっていたのである。今となっては老船長は自分で使ってしまった分を全額は返すことができないが、几帳面にも一部だけを返してよこす。だが、ロビンソン・クルーソーは差し出された全額は受け取らず、受け取った分もブラジルの農園を自分のものとして確認したときにすべて返却した。さらに、この老船長とのあいだで清算した後の6年間とさらにその後の4年間の収入については、彼の農園の二人の管理人たちの遺族が財産を管理していた。

彼が法律上死亡として認定され、修道院と国王に収入が贈与されたあいだ、修道院ではそれらの収入を慈善施設に贈っていたが、872モイドールは修道院の手元にまだ残っていたので、ロビンソン・クルーソーに返還するつもりだというのが、残りの3分の2にあたる国王に渡った分は、返還されることはなかった。

これら老船長とブラジルの財産管理人の話で時間が関係するのは、ブラジルの農園からの収入が貨幣に換算して計算され、それらが毎年積み重なる、という文脈である。それらは財産の管理者とロビンソン・クルーソーとのあいだで、債権と債務という言い方になっている。

4. 富 (wealth) とは何か

さて、ここで「富 (wealth)」とは何か、という問題について考えてみることができるだろう。これもやはり、島に漂着するまで、島において、

そして島を脱出してから、という3つの側面に分けて考えてみる。

ロビンソン・クルーソーが島に漂着するまでの期間においては、彼が手に入れる「富」の源泉は明らかである。彼がイングランドとアフリカ沿岸地域の間を往復することによって、その両地域間にある差異を活用することで、最初彼の手元にあった40ポンドが300ポンドにもなってしまう。彼はそれを「私が新たに得た富(my new gained wealth)」として言及しており(p. 40)、富とはポンドという単位でその量を計算できるものとされている。

この富はロビンソン・クルーソーの「労働」とは関係がない。アフリカ沿岸にまででかけていくことを労働とみなすならば話はまったく別であるが、彼自身もそのようなことはしていない。彼はその航海に出る際に自分が活動できる時間を「労働」として売っているわけではない。彼がしたことはそんなことではない。彼は、イングランド国内でだれか別の人々が生産した雑貨類を40ポンドの対価として入手し、それらを船に載せてアフリカ沿岸の別の土地に運んだのである。重要なのは、二つの地域のあいだを行き来したことである。

アフリカ沿岸ではポンド貨幣は流通していないので、イングランドとまったく異なる経済的環境にある。言ってみれば彼の活動は、彼のいうとおり「商人(merchant)」または「貿易商(trader)」としての活動として特徴づけられるもので、そういう二つの地域を往復することで、別個の土地に境界線をまたいでかけていったことである。その外部の土地がアフリカであったことは偶然のことであり、たまたま彼の先輩の船長から知識がもたらされたのである。おそらくポルトガルの航海士たちがアフリカ西海岸を南下していった経験の起源として、ヨーロッパ人のあいだに口コミでもたらされた知識であった。だからその土地はアフリカでなく、アメリカでもよかったであろう。重要なことは、ロビンソン・クルーソーが本拠としているイングランドに対してその土地が彼のいう富をもたらすことが可能な外部としての地位におかれる可能性がなければならないことで

ある。

漂着した島においては、彼は自分でもいうとおり労働をしていることになっている。島の自然環境のなかで生活をしながら穀物を栽培し、動物を飼育し、その他のものを自分の手でつくっているからである。彼が確かにそのような労働によって生み出しているものがあることは確かであるが、注目すべきことは、それらの彼の労働の成果については「富（wealth）」としては言及していないことである。「富」とは彼にとってあくまでも貨幣として具現化されていなければならないようなのだ。

すなわち、彼が島に漂着して直後、自分の乗ってきた船の残骸のなかに発見する「ヨーロッパやブラジルの貨幣、スペイン弗貨、そのほか金貨銀貨など、とりまぜて英貨にして三十六ポンド相当額のお金」のことがすなわち「富」なのである。彼はそれらを見ながら「無用の長物」と言い放ったのだが、考えなおして「身につけたそのモノの重みで苦労しながら」持ち帰ったあと、つぎのようにいう、「私はわが家である小さなテントに帰り着くと、そこで全部の富（wealth）を身のまわりにしっかりと確保して横になった」（p. 76）

つぎに、島で生活を始めてから22年くらいを経過しようとしていたとき、彼は島に漂着したスペイン船らしき難破船を発見する。その難破船のなかで実にさまざまなものを見つけ出すのであるが、「二つの箱からみつけだしたのから考えると、この船は巨万の富（wealth）をつんでいたと思われるふしがあった」（p. 196）。それらのなかに、「スペイン弗貨のはいつている大きな袋が三つもあった。計算してみると全部で千百枚もあった。袋の一つには紙につつんだダブロン金貨が六枚、金の小さな延べ棒や楔形のもの数個あった。目方にしたらみんなで一ポンドくらい」あった（p. 197）。さらには別の箱のなかに「ロイアルでスペイン弗貨約五十枚分がはいっていた」（p. 197）。そして彼は「これらの重いお金を洞穴まで引きずるようにしてもってゆき、前に私自身乗っていた船から運んできたお金と同じように、しまっておいた」（p. 198）。

これから2年が経過したときに、彼はつぎのように述懐する。「以前に比べれば富(wealth)はふえたが、ゆたかになったわけではなかった。なぜなら、スペイン人がやってくる前のペルーのインディアンたちと同じく、私は富があっても使いようがなかったからである」(p. 199)。ここでいわれている「富」とは、さかのぼること2年前に「前に私自身乗っていた船から運んできたお金と同じように、しまっておいた」、その金貨の類であると考えていいだろう。島にいるという境遇では「使いようがなかった」という言葉から、そう判断すべきであろう。

このときまでに、アフリカに航海して入手した300ポンドが富(wealth)といわれたし(p. 40)、ブラジルで農園を経営してたくわえたのがやはり富(wealth)であった(p. 58)。すでに確認しておいたように、それらの富の場合は、島における彼の「労働」のような活動はともなわず、自分でもいうように「商人」としての活動で手に入れたものだったのである。その点では漂着した島のなかで彼は、スペイン人がやって来る前のインディアンと同じように、「貧困でもなければ、裕福でもない」²⁰⁾という状況に置かれていることになり、彼も実際にその意味のことをつぎのように述べる。「ゆたかになったわけではなかった(I... was not at all the richer.)」(p. 199)。インディアンたちの貧困とは、スペイン人たちがやってきたことによりもたらされたのであり、それ以前に彼らは、孤島のロビンソン・クルーソーのように、貧困でも裕福でもなかったのである。

島を脱出して以後は、すべてが「富」の話でロビンソン・クルーソーの物語が進行するといっても過言ではない。それらの具体的な数字はすでに紹介したとおりである。それらの言説において富(wealth)は持ち運びのできるものである。それはまた船に乗せて運ぶことができるので、彼は「私の全部の富が自分の近くにきていると知ったとき...」(p. 280)ということができる。すでに到着しているとされるその富とは、彼が受け取った手紙から判断すると、老船長と清算した年に続く6年間の農園からの収穫である1,174モイドールの貨幣、その後の4年間のモイドール金貨にして

3,241枚におよぶ収入、修道院長が返還すべきものとして送ってよこした872モイドルである。のちに彼はそれら「全部の富をたずさえてイングランドへ向けて行く準備をした」(p. 282)のである。ロビンソン・クルーソーにとって富とはかくて、金貨や銀貨の数や貨幣の価値として計算可能なもの、ということになるだろう。

彼がブラジルに農園を残したまま行方不明になったあとで、彼の財産としてその農園の代理人による経営からあがる収入に関する記述があり、それらの金銭が債権となったり、あるいは債務となったりする。しかも、その価値の計算が数字の上でおこなわれて、現物の金貨の類は最後まで実際に目にするのがないまま、どんどんと話が進行している。いわゆる信用の秩序のようなものができあがっているのである。

彼が最初に冒険(adventure)に出る前に、何かしら落ち着かない様子でどうしても海にでていかざるをない衝動に駆られていた。彼が自分の物語を語り始めたころの当初は、彼は自分の父親の意思にそむき、「どんなことをしても抵抗できない執拗さが私を駆り立てて」(p. 37)、そうして海に出て行ったと述べ、そのことが自分の破滅(destruction)であったとしきりに述べていた。ブラジルに農園主として土地を手に入れて順調であったときにも、同様のことを述べていた。そのブラジルの農園に落ち着いて生活していたならば、のちに28年間もの孤島での生活を余儀なくされるような不幸な運命は自分におとずれなかったであろう、というわけである。そのような不幸におちいったのは、「外に出て放浪しようとする自分の愚かな性癖」が自分にそなわり、その性癖に「明らかに頑迷にこだわって」その性癖どおりに行動したからなのである(p. 58)。

ところが、彼は自分のそれまでの行動様式、「愚かな性癖」と名づけていたものに対して最終的に肯定的な評価を与えることになる。島を脱出してリスボンの老船長のもとにたどり着き、「突然にして正貨5千ポンド以上の金銭を手に入れ、年収千ポンド以上の不動産といってもいいものを持つことになった」(p. 280)ときのことである。彼は「ヨブの終わりは最初

よりもよかった」(p. 279)として『ヨブ記』第42章第12節にある聖書のことばを引用し、自分の物語を預言者ヨブの物語にたとえる。ヨブと同じように、自分の結末はよかったと述べるのである²¹⁾。

物語叙述の開始当初は、自分の不幸をもたらしたものだとして執拗に後悔の念をもって述べていた放浪癖、それが一転して結果として肯定されていることになるだろう。すなわち、イングランドやブラジルという内部だけにとどまることなく、それらの外側に進出することにより、イングランド、ブラジルに対して外部にあたる地域を生み出そうとする意思だと言い換えてみればいいたろう。そうして彼の演じる役割とは、最初に自分で述べているような、「商人」あるいは「貿易商」としての役割である。しかも、そのような役割を演じることこそが、彼すなわちヨーロッパにとってもっとも大きな利潤、すなわち富をもたらしてくれることを語っているのである。もちろん、ヨーロッパの側のそのような行動は、「裕福でも貧困でも」なかった地域に貧困をもたらすことを意味した。

マルクスが述べている言葉で言い表すならば、「本来的な商業民族」が「古代世界のIntermundien(種々の世界間の空隙)にのみ生存する」、「エピクロスの神々」に似ているのと同様に²²⁾、ロビンソン・クルーソーとは、ある世界とそこから見て外部の世界に存在している「隙間」を活用して機敏に動き回っている存在である。彼の物語におけるそのような側面がこれまでほとんど顧みられずに、その物語が単に島の内部における彼の円環的時間に捕縛された生活に還元されてきてしまったのは、島で過ごす彼の生活に「労働価値」を見出した人々が、それぞれの理論を正当化するためにロビンソン・クルーソーを利用したからだというのが正しいであろう。

注

- 1) 英文テキストはDaniel Defoe, *The Life and Adventures of Robinson Crusoe*, edited with an Introduction by Angus Ross, Penguin Books, 1965による。引用文のページ数はこのPenguin Books版による。訳はいずれも岩波文庫版『ロビンソン・クルーソー(上)』(平井正穂訳)を主として参照して引用させていただいたが、一部を

修正した場合もある。

- 2) その文は原文では「持っていく」というよりも、置かれてあるその貨幣を取り上げたということであり、手にとってキャンパス地の布切れに包んだということである。
- 3) 岩井克人『貨幣論』(ちくま学芸文庫、1998年) p. 068.
- 4) ロビンソン・クルーソーがギニア海岸でどういう交換の仕方をしたかはむろんわからないが、それと同じようなヨーロッパ人と原住民の出会いの様子を語った原テクストとしては、コロンブスの『航海記』の記述がある。彼が最初の航海において出会ったカリブ海の人々から金のありかを熱心に聞きだそうとしている様子のことであり、その様子は、交換というよりは略奪に近いのではないかとさえ思わせるふしがある。林家永吉訳『コロンブス航海記』(岩波文庫、1977年) p. 40, p. 45 など。
- 5) P. ヒューム『制服の修辞学』(法政大学出版会、1995年) p. 260.
- 6) 平井訳の注、p. 412.
- 7) 17世紀のころはイングランドに綿織物産業が形成されてはいなかったはずであるから、確かに「毛織物」なのであろう。ただし、この言明はごく素朴に考えれば疑問をさしはさむ余地がある。というのは、亜熱帯のブラジル地域で「毛織物」のような製品が貴重であったとは考えにくいからだ。ほとんど裸で暮らすことができる人々が何のために毛織物を必要としたのであろうか。
- 8) この英語は「四倍以上の対価」としたほうがいいかもしれない。だとすれば利益は300%ということになる。
- 9) 川北稔『砂糖の世界史』(岩波ジュニア新書、1996年) p. 55.
- 10) 岩井克人『資本主義を語る』(ちくま学芸文庫、1997年) p. 182.
- 11) 平井正穂『ロビンソン・クルーソー』(下)(岩波文庫、1971年) 解説 p. 413.
- 12) カール・マルクス『資本論』(長谷部文雄訳、青木文庫、1952年) 第1部第1分冊、p. 178.
- 13) 岩井克人『資本主義を語る』(ちくま学芸文庫、1997年) p. 016.
- 14) 同書、p. 016
- 15) 正木恒夫『植民地幻想』(みすず書房、1995年) p. 98
- 16) 正木恒夫、同書、p. 98.
- 17) 岩井克人「貨幣 金融危機の根源にあるもの」における発言、『大航海』(新書館、1999年4月号) p. 51 .
- 18) ロビンソン・クルーソー物語の発想に重要な役割をしたといわれるアレクサンダー・セルカークの実話は、島に滞在した期間はロビンソン・クルーソーと比べればずっと短い。1704年から1709年まで、4年半ほどのことであった。セルカークについては、*Dictionary of National Biography* による。
- 19) 川北稔『アメリカは誰のものか』(NTT出版、2001年) p. 107
- 20) 大澤真幸『文明の内なる衝突』(日本放送出版協会、2002年) p. 105.

カリブ海とロビンソン・クルーソー物語（5）

- 21) ロビンソン・クルーソーの物語で原文は‘the latter end of Job was better than the beginning.’であり、『ヨブ記』の英訳では、‘The Lord blessed the latter part of Job’s life more than the first.’となっている。
- 22) カール・マルクス、上掲書、p. 182. 訳者の注記によれば、エピクロスの説によると、その Intermundien（種々の世界間の空隙）に「永生不死の神々が住んでいる」という。Mundi は mundus から来たラテン語で「世界」の意味、inter は「の間に」ということである。「世界」は、現在のように地球全体を意味するのではなく、ひとつの経済圏としてまとまった社会のような意味であろうと想定される。ロビンソン・クルーソーがイングランドとギニアの間を行き来したように、ヨーロッパ、ギニアがそれぞれひとつの「世界」である。マルクスのこの文は、岩井克人『二十一世紀の資本主義論』（筑摩書房、2000年、p. 267）では、「いろいろな世界のあいだの隙間にいたエピクロスの神々のように」として引用されている。